

まさに「躍動する音たち」の共演。 アジアの伝統音楽が、奏楽堂に鳴り響く。

東京藝術大学の「演奏芸術センター」は新しい総合的な舞台芸術作品の創造を行うことを目的とする美術学部・音楽学部の枠を超えた教育研究を行う場。2007年度は同大学の創立120周年で各種記念事業が行われたが、そのひとつがアジアの楽曲のコンサート「アジア・躍動する音たち～日中韓交流演奏会～」だ。



新疆ウイグル自治区各地に伝わる音楽組曲「ムカーム」の演奏

アジアの著名な国内外の音楽家たちが参加。

「演奏芸術センター」は東京藝術大学の直轄のセクションで、演奏と名がついてはいるが、音楽だけではなく、舞台照明、舞台映像技術等の教育研究、ホール技術実習など、芸術と社会の関わり方をテーマとした様々なアート・マネジメント実習と演習を行っている。世界で初めて客席上部全体の可変天井を装備した「奏楽堂」がその舞台だ。教授陣には演奏家、作曲家、演出家や照明家なども名を連ねている。

同センターの事業には3つの柱がある。作曲家を1人決めて、音楽学部のピアノ科、声楽科など各科が演奏を行う「芸大の響き」。逆に各科が独自の企画で演奏を行う「奏楽堂シリーズ」。そして、ジャンルにとらわれず、美術や映像とのコラボレーションや、実験的な催しを行うものが「芸大21」である。

「2007年は創立120周年でもあり、何か変わった企画をやるとうことで、『芸大21』で音楽を紹介しようということになったのです」と作曲家で同センター教授の松下功さんは語る。

日本では西洋音楽の演奏会は盛んだが、アジアの音楽

会となると数はあまり多くない。

「企画を皆さんに話したところ、民族音楽の専門家の先生が、賛成してくれたんです。手応えは最初から十分でした」

また中国や韓国の大学から、日本で言えば人間国宝にあたるような教授たちが参加してくれることが決まった。

こうして2007年6月23日、奏楽堂にて大規模なアジア音楽の演奏会「アジア・躍動する音たち～日中韓交流演奏会」が上演されたのである。

アジア各地の音楽の類似点と相違点が、シルクロードを渡った音たちの歴史を語る。

当日の奏楽堂は舞台と客席が一体となり、かなりの盛り上がりを見せた。第1部は韓国の国立伝統芸術院が韓国の組歌「歌曲(カゴク)」を披露し、伝統歌曲の真髄を伝えた。第2部は山田流箏曲の江戸の組歌が聴衆を魅了し、第3部はウイグルの組歌「12ムカーム」が悠久の時を超え、奏楽堂に鳴り響いたのである。「ダップの踊り」では踊りも披露された。この日使用された楽器も多種多様で、まさに国際交流を絵に描いたような音楽会だった。

松下功教授は



箏・唄・尺八の演奏による「秋篠寺」



雅楽との共通点が多い韓国の「歌曲(カゴク)」

「本当に素晴らしい音楽会でした。東京藝術大学には中国や韓国の留学生が多く、彼らを大切にしようという気持ちが常にあります。彼らが国に帰ったとき、日本に好意的でいてくれるかどうか、国際交流の大切なところですかね。その面でも実りのある会だったと思います」と語る。

また、演奏会を通じて発見もあった。それは、音楽の面でもシルクロードを通じて日本を含め世界はつながっているという認識である。

「ウイグル地区の楽器の編成がアラビア半島とまったく同じであったり、バイオリンとまったく同じ調弦でカデンツァをする弦楽器があったり、ダップ・タンブルと呼ばれるタンバリン専門の演奏者がいたりですね。興味深い発見がたくさんありました」と松下教授が説明する。

音楽がアラビアで発祥し、シルクロードを東へ、西へと進んでいった流れが、この音楽会では聴衆の目の前で繰り広げられたのである。逆にそこには、それぞれの地区独自の文化や生活様式が融合し、変化していった様子も



「ダップの踊り」では珍しいウイグル民族の踊りも披露された

見て取れるようだったという。

同センターでは、この成功により今後もこうしたアジアの音楽を紹介する演奏会を続けていく予定である。2008年度はインド音楽に決まった。そこではどんな発見があるのか、楽しみである。

●担当者より

教育、文化交流、歴史的成果、どれをとっても成功の音楽会になりました。



このたびは文化事業に対する深いご理解をいただき、ありがとうございます。ただ素晴らしい演奏会であっただけではなく、私たちにとっても伝統音楽の融合と保存というテーマが明確になった意義のあるものでした。また、参加いただいた各国の皆さんにもたいへん喜ばれ、固い絆を改めて結ぶことができました。奏楽堂ではいつも新しい芸術的なチャレンジを行っております。機会がございましたら、ぜひ足をお運びいただければと思います。

東京藝術大学 演奏芸術センター 松下功教授（作曲家）